



渡部豊子さん（昭和17年生まれ、新庄市出身。）

「新庄民話の会」結成当初からのメンバーで、新庄・最上に伝わる民話の語り手として、市内の小・中・高生はじめ福祉施設、老人クラブなどでも語りの活動を行っている。平成26年から3年連続でインドのネルー大学でも口演するなど、各地で昔語りを披露し新庄をPRしている。

工藤

「新庄民話の会」の活動はいつも拝見しております。私も毎年語りのイベントを楽しみにしている一人です。毎回会場が満員になるのは根強いファンがいてのことですね。

渡部

こちらこそ、私たちがなんて昔語りしかできないんだから、工藤さんみたいな協力者や「新庄ふるさと歴史センター」が事務局としてバックアップしてくれないと何にもできないし、本当に感謝しています。毎年春に発行している「てんぐだより」の原稿づくりや印刷に始まり、平成22年「全日本語りのまつり」が新庄で開催された時も、平成25年「やまがた語りのつどい」で東京学芸大学の石井正己教授の基調講演を開催した時も、活動資金の調達ではぶらっと大変お世話になりました。工藤さんのサポートが無かったらあんなに大きい事業はできなかったから相談して良かったですね。

工藤

そんなこともありましたね。私が渡部さんや民話の会の活動を知ったのは、もう十年以上前の事です。振り返ってみると懐かしいです。私が「新庄市市民活動交流ひろばぶらっと」で市民活動支援に携わる前、新庄観光協会に勤務していた時に、渡部さんの著書を薦められ読んだのが最初でした。私はおぼっちゃんっ子だったのでっすから昔語りをして

工藤

私も人前で語ろうなんて思わなかったから、ただ会員のお年寄りたちが昔語りするのを面白いなあと思って聞くだけだったね。

渡部

渡部さんが語り手になったきっかけは何だったんですか？

それが、その頃に語り手だったお年寄りたちは、1〜2年もするうちに、体調を崩したり、運転できないから乗せてくれる人がいないと行けないとかいう理由で、一人抜け二人抜けして、語れる人が少なくなっていました。それで、自分と同じ、もしくはちょっと上の先輩方が語りの練習をするようになっていったけど「会場の後ろまで聞こえるように大きい声を出して」とか「子守唄は上手に歌おう」とか、ピアノや音楽を流す演出をする人もいて、私は「これは本当の昔語りじゃない」という気持ちが出てきてしまっていました。小さい時に自分の祖父母から聞いてきたものが昔語りだと思っていたから、ただそれを思い出して語るしかできなくてやっていたんだよね。そうしたら、真室川から来ていた先輩方が「あなたの語りが本物だ、頑張らなきゃならないよ」と言っていて、「あなたが語らないよ」って励ましてくれたの。それで、「あ、これいいんだ」と思ったし、そう



「みちのく民話まつり」で語る様子  
(会場：国指定重要文化財 旧矢作家住宅)

るよ。これは昔から続いてきた知恵だし文化なの。時代が変わっても本質は同じ。親が子育てに悪戦苦闘しているからこそ、祖父母世代の出番なのよ。私は自分